

最優秀賞

【外国語科・総合的な学習の時間】

地域と世界をつなぐ探究学習(ESD) デザインの構築と実践研究

滋賀県草津市教育委員会

やまもと ひろ ゆき

山本 寛之



1 | はじめに

私は昨年度まで草津市立松原中学校に勤務していた。そこでは、3年生の担任を務め、それから3年間は生徒指導主事を務めた。その中で、生徒が抱えている複雑な課題や学校自体が抱えている課題を感じていた。生徒が抱えていた課題とは、生徒の自尊感情が低く、粘り強く取り組むことが苦手な生徒が多いことであった。学校が抱えていた課題は、地域とのつながりが弱く、地域と協働するような教育活動が極端に少なく、社会に開かれた教育課程の実現に苦心していることであった。

このような状況の中で、同校は令和4年度より草津市が推進する「スクールESDくさつプロジェクト」の研究指定校として位置づけられた。私は、この取組がこれらの課題を解決する糸口となるのではないかと考え、ESD推進主任に手を挙げ、令和5年度から学校全体でESDの推進に努めた。そこで、見えてきたことは地域が抱える課題である。松原中学校校区で多く栽培されている、草津市の農産物である「ベジクサ」の認知度が低いことである。そのことから私は「Think globally, Act locally」の視点から、総合的な学習の時間を「松原G-GRIT (Gaining for Globalization of Respect, Identity and Thought) 学習」と称し、世界規模の課題を学習する「松原未来学習」と、地域の課題解決と向き合う「松

原ローカル学習」の二本柱によって、3年間を見通した系統的かつ連続性のある学習を構築した。

2 | 主題設定の理由

本取組は、3年間にわたる松原G-GRIT学習の集大成として位置づけた。地域課題から世界規模の学習へと発展させるとともに、英語科との教科横断的な実践とすることで、これまでに培った課題発見・探究の姿勢を、英語という言語活動を通じて表現・発信し、学びを実社会へとつなげることを目指した。

ESD for 2030の「2.2目標と目的：共感、連帯、行動に関連する資質・能力を重視すること」が示すように、目の前の課題を「自分事」として捉え、協働を通して地域レベルでの活動を推進することは、個人の価値観や行動の変容を促す。さらに、本校にとどまらずインドネシアの中学生と湖沼保全という共通のテーマで交流することで、多面的・多角的なものの方や考え方を取り入れることができる。そのことが、生徒一人ひとりが地球市民の一員として力を合わせ、持続可能な湖沼の実現を目指すことにつながると考え、これを主題設定の理由とした。

3 | 草津市における学びのサイクル

ESDの実践において道標となるのは「探究のサ

イクル」である。学習指導要領でも探究のプロセスは示されており、松原中学校や私自身の実践においても「スクールESDくさつプロジェクト」を実施するまでは、それに則った実践を行ってきた。しかし、図1の草津市が目指す学びのサイクルは、学習指導要領の探究プロセスに加え、収集・整理した情報をもとに課題解決のための具体的な「提案」を行い、さらに行動計画に基づいて「行動・発信」することを目標としている。こうしたアウトプットを通して児童生徒が大人から賞賛や評価を受けることは、自己肯定感を高めるとともに、地域社会の一員としての「意識」と「行動力」を育み、次の学びのサイクルへとつながっていく。また、児童生徒の行動や発信から大人が学び、新たな気づきを得たり、行動化へとつながることも多いと考えられる。まさに「地域が人を育て、人が地域を育てる」という好循環が生まれるのである。

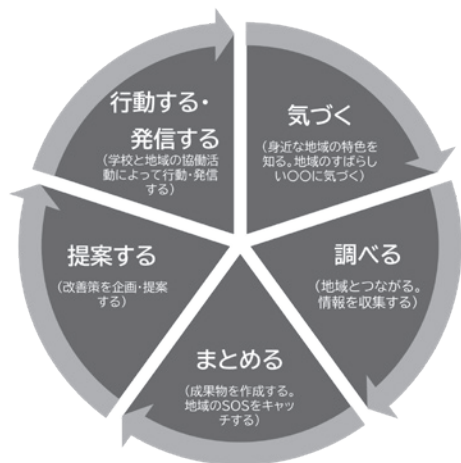


図1 草津市が目指す学びのサイクル

4 | 目指す生徒像と課題から 見えてきたもの

本取組の実践にあたり、英語科としては「英語を学習する必然性との出会い」を、また総合的な学習の時間としては「広い視野を持つ機会の創出」を大きな目標として設定した。3年間の英語学習においては、基礎的・基本的な知識や技能の習得にとどまらず、広い視野を獲得し、世界的課題を理解し感受できる生徒の育成を目指すことを重視している。

さらに、2年間にわたって実施してきた松原G-GRIT学習については、2年生の10月に実施した生徒アンケートの結果を表1(抜粋)に示した。このアンケートから、従来の取組における課題が明らかとなった。すなわち、生徒は松原G-GRIT学習を通してSDGsに関する知識を着実に蓄積している一方で、それらの知識を生活や地域社会の課題に結び付け、自らの問題として主体的に行動しようとする姿勢は十分に育成されていないことが判明した。

本単元では、この課題を踏まえ、中学校3年生の1年間で生徒が15年間生活してきた地域資源である滋賀県の琵琶湖を題材とし、その環境課題を再認識させることを目的とした。そして、その課題を自分自身の問題として捉えると同時に、解決に向けて具体的に行動できる力を養成することを目指した。加えて、地域課題への取組を通じて、地球市民の一員としての自覚を涵養し、持続可能な環境の保全に向けて主体的に考え、行動する資質の育成を図ることを本研究の目標とした。

表1 G-GRIT学習に関するアンケート結果

質問項目	肯定的回答
持続可能な開発のための目標 (SDGs) を知っている。	95%
地球規模の具体的な課題があることを理解している。	92%
課題に気づいて自分で行動を変えた。	57%
日常生活でSDGsの目標達成を意識している。	68%
望ましい未来像の実現のために計画を立てている。	49%

5 「世界湖沼の日」と インドネシアとの交流

琵琶湖に関する学習をより深化させることを目的として、滋賀県琵琶湖保全再生課を訪問した。訪問においては、世界における琵琶湖の希少性、滋賀県が展開している保全活動の具体的内容、さらには琵琶湖の環境保全に対する国内外での評価について知見を得ることができた。その際、インドネシアが国連に提案していた「世界湖沼の日」に日本も賛同し、滋賀県として制定に向けた取組を推進している現状についての説明を受けた。

私は、先に述べた「目指す生徒像」の実現を図るため、本単元の到達目標としてインドネシアの中学生との交流を位置付けることとした。その後、世界湖沼会議を主催する国際湖沼環境委員会 (International Lake Environment Committee: ILEC、草津市所在) を訪問し、同委員会を通じてインドネシア・中部ジャワ州に所在する SMP Negeri 21 Semarang (セマラン第21国立中学校、以下SMPN21) を紹介され、交流の具体化に至った。

6 仮説の設定

本実践を通して私は、琵琶湖を題材とした学習と「世界湖沼の日」を契機とするインドネシアの中学生との交流を組み合わせることで、生徒が持続可能な社会の構築に向けた課題を自らの問題として捉え、主体的な態度を養うことが可能であると考えた。そこで私は「インドネシアの同世代と課題解決型のプロジェクトを共有し、成果を発表し合うことで、望ましい未来像の実現のために計画し、行動できる意思を持つことができる」という仮説を設定した。

7 学習計画と具体的な取組

本単元は全14時間で構成し、英語科と総合的

な学習の時間の教科横断型の実践として取り組み、次ページの表2の流れで学習を進めた。

7.1 レッドリストについての理解

単元の第0次として、生徒の絶滅危惧種に関する理解を深化させることを目的に、夏季休業中の課題としてThe IUCN Red List of threatened speciesのウェブサイトを活用した学習を設定した。生徒は同サイトに掲載されている動植物の中から1種を選択し、「なぜ当該種がレッドリストに掲載されているのか」および「当該種を絶滅の危機から救うためにどのような行動が可能か」を英語でPreparation Sheetにまとめることを課題とした。私はこの活動により、生徒に知識の習得にとどまらず、絶滅危惧種保護への具体的な理解と主体的な考察を深めさせることを目指した。

7.2 自分事として考える

東京書籍『New Horizon 3』Unit 3 “Animals on the Red List”に掲載されている、日本にかつて生息していたトキおよびコンゴ共和国に生息するゴリラの事例を題材とし、人間の経済活動が動植物の絶滅を加速させている現状について生徒に気づきを促すことを目的とした。特に本文中の1文 “If we lose one species, it affects many others.” に着目し、生態系の相互依存性に関する理解を深めたいうえで、環境保全に関する学習へと発展させた。

しかし、総合的な学習の時間において、環境保全をテーマとした課題解決型学習を行う際には、生徒が学習内容を「自分事」として捉え、主体的に行動へと移すことができるかという点について常に課題を感じてきた。これまでにも地球温暖化や日本の食料自給率を扱う学習に取り組んできたが、その内容が生徒の生活に直接的な影響を与えるとは限らず、主体的な関わりの程度を測ることは困難であった。そこで本単元では、生徒が自身の生活と学習内容を関連付けやすいよう、“If we lose one species, it affects many others. What happens for human beings?” をテ

マに、ストーリー性のある4コマ漫画を作成し、自分自身ができる環境保全に向けての行動を考える課題を設定した。

その結果、大半の生徒が自らの生活と関連付けて表現しており、資源の節約や廃棄物の削減、地域の自然保護活動への参加など、日常生活に


即した提案が多数見られた。このことから、本実践は当初の懸念であった「自分事として捉えることができるか」という課題に対し一定の成果を示し、生徒が環境問題を抽象的な知識としてではなく、自らの生活に結び付けた実践的行動として捉える契機となったことが示唆された。

表2 学習計画表

総合 次	英語 次	学習内容	市の学びの サイクル
—	0	・レッドリストについての理解を深める	・気づく・知る・調べる
—	1	・学級内で調べた内容を発表し共有する	・気づく・知る
—	2~4	・教科書内に掲載の動物について理解を深める	・気づく・知る・調べる
—	5	・学習した内容を自分事として捉え、まとめる	・まとめる
1	—	・滋賀県(琵琶湖)の現状とMLGsについて知る	・気づく・知る
2	—	・「世界湖沼の日」制定に向けて世界や滋賀県の取組について知る	・気づく・知る
—	6~9	・持続可能な琵琶湖の実現に向けての提言をする	・提案する
3	—	・「世界湖沼の日」を応援するモニュメントを制作する	・提案する
—	10	・インドネシアの中学生と交流する	・行動する・発信する
—	11	・単元を通して振り返る	・気づく・知る

What's the Red List?
The Red List is a list of endangered species. Now, more than 163,000 species are listed on the IUCN Red List. Even among them, more than 49,300 are endangered. 41% of amphibians, 37% of sharks and rays, 36% of leaf-cats, 24% of corals, 26% of mammals, and 12% of birds are endangered species.

Let's find out about an animal on the Red List.
Polar bears are an endangered species. Polar bears live throughout the Arctic Circle. Their food is mainly seals. They can live from 25 to 30 years. They can swim more than 160 kilometers.

the animal's picture



Why is the animal on the red list?
In recent years, the melting period of sea water has been prolonged due to global warming. That's why polar bears starve to death because they can't hunt. More over, recent research suggests that environmental pollution can cause their deaths.

How can you save the animal?
I think we must reduce power consumption. (I think... I have Creasons. First... Second...)
I think that we must reduce power consumption. I have two reasons. First, saving electricity can slow global warming and prevent sea ice from melting. Second, for example, there are many things we can do close to, such as saving electricity from air conditioners and lighting. For these reasons, I think that we must reduce power consumption.

<https://www.iucnredlist.org/ja>

What's the Red List?
The Red List is a list of wildlife species that are likely to become extinct. An endangered species is a species of living creature that is at risk of becoming extinct. There is a difference like this. The official name is The IUCN Red List of Threatened Species.

Let's find out about an animal on the Red List.
I'm going to introduce Kakaban. It's a bird. It looks a lot like a parrot or a parrot. It lives in warmer regions such as Indonesia and East Timor. It's listed as Critically Endangered (CR) on the Red List. It's friendly and docile. It can't fly.

the animal's picture


Why is the animal on the red list?
From 1980 to 1992, large numbers of small-tailed terns were captured for the purpose of keeping them as pets, resulting in a sharp decline in the number of individuals in the wild. I think people are catching them for nothing, saying they want to keep them as pets.

How can you save the animal?
I think it is important that many people know that many animals are on the Red List. I have three reasons. First, we can ask people to cooperate with forest protection. This will create a safe and secure place for animals to live. Second, I think the importance of animals can be conveyed through posters and calendars. That way, you won't have to hunt animals unnecessarily.

<https://www.iucnredlist.org/ja>
For example, write a poster or recommend a book.

資料1 Preparation Sheet

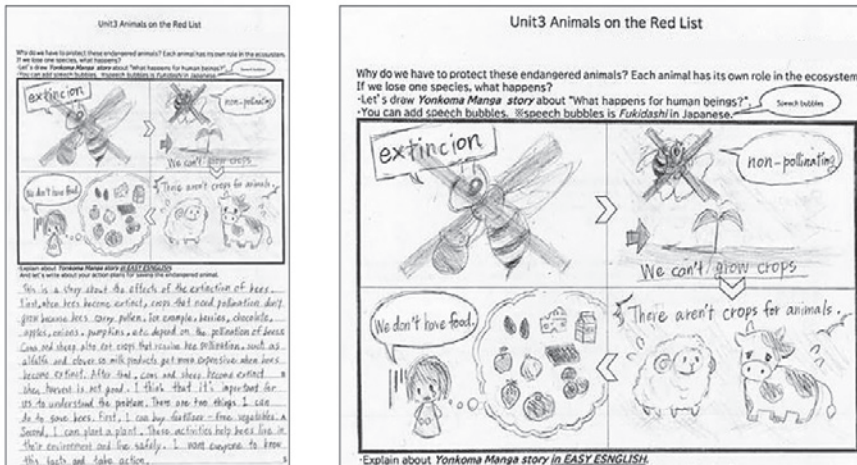
7.3 持続可能な琵琶湖の実現に向けての提言

本実践は、英語科と総合的な学習の時間を横断する教科横断型の学習活動として位置付けられる。これまでの取組では、主として英語科の授業内で教科書の内容を踏まえた学習活動を実施してきた。さらに発展的活動として、生徒は身近な自然環境である琵琶湖における動植物の中にも絶滅の危機にある種が存在することを認識するとともに、「自分たちが大人になったときの琵琶湖の望ましい将来像」とその実現に向けたアクションプランを、既習の英語文法事項を用いて考察し、発表する学習活動を行った。

加えて、発表に先立つ事前課題として、生徒

自身が実際に琵琶湖を訪れ、「私が後世に残したい琵琶湖の風景」をテーマに写真撮影を行う活動を設定した。本課題において重視した点は、単に視覚的情報として琵琶湖を捉えるだけでなく、嗅覚や聴覚などの多様な感覚を通して自然環境を体験することで、より深い理解と主体的な関心を喚起することである。

結果として、事前課題については保護者の方々の協力もお願いしたため、学校での教育活動の周知や家庭内での会話の話題にもなったようであった。それらのことから、ほとんどの生徒が課題を提出することができ、アクションプランにおいても様々な切り口で発表することができた。



資料2 自分事として考えるワークシート



資料3 「私が後世に残したい琵琶湖の風景」



資料4 生徒のアクションプラン

7.4 「世界湖沼の日」応援モニュメント制作

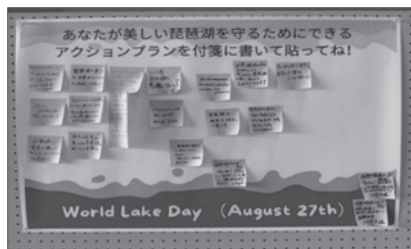
本単元を通じて、生徒の間には動植物の保全や琵琶湖の環境保全に対する意識の高まりが見られた。その過程において、環境保全の取組を形として表現しようとする機運が醸成されていた。こうした背景を踏まえ、実践の一環として「世界湖沼の日」応援モニュメントの制作を行った。具体的には、生徒一人ひとりが「私が後世に残したい琵琶湖の風景」をテーマとして撮影した写真を現像し、その写真上に自身が考えたアクションプランを記入した後、琵琶湖の形を模した板に貼り付ける活動を実施した。制作にあたっては有志で生徒ボランティアの協力を得て、活動全体を円滑に進めることができた。さらに、完成したモニュメントは草津市役所や滋賀県庁、琵琶湖博物館に展示され、学習成果を広く社会に発信することができた。この展示を通じて、草津市民のみならず滋賀県民や異世代の人々にも本活動が共有され、生徒の学習の意義を多様な層に伝えることができた。このように、本活動は学習成果を可視化するだけでなく、地域や行政機関との協働を通して学習を社会的文脈へと拡張し、多世代・広域的な啓発へとつながる取組となった。



資料5 モニュメントを制作している様子



資料6 「世界湖沼デー」応援モニュメント展示



資料7 各展示先で付箋にアクションプランを募集

7.5 インドネシアの中学生との交流

国際湖沼環境委員会 (ILEC) の紹介を契機として、私はSMPN21の校長および担当者と連携を開始した。SMPN21は本取組の趣旨を快諾され、発表会の実現に向けて前向きに準備を進めていただいた。さらに、事前のZoom接続確認においては、現地の発表者である生徒を同席させるなど、積極的に協力していただいた。こうした対応は、本実践の成功に向けたSMPN21の強い協力姿勢を示すものであった。

発表当日は、司会進行を含む全ての運営を松原中学校の生徒が英語で行い、松原中学校からは約130名、SMPN21からは31名の生徒が参加した。松原中学校の代表生徒3名は琵琶湖の環境保全に関するアクションプランを英語で発表し、SMPN21の代表生徒1名は地元の湖であるラワ・ペニン湖の保全および活用について報告を行った。発表後には、双方の生徒が英語で質問を交わす場面が見られ、生徒の主体性や積極的な姿勢が見られた。



資料8 インドネシアとの交流

8 本単元の振り返りと考察

私はこの単元の終了後に松原中学生とSMPN21の両校に同様の振り返りを実施した。そこではこの単元を通していくつかの質問を設定し、主にESDに関する質問項目について回答を求めた。

まず、この学習を通して、『ESDの視点に立った学習指導で重視する能力・態度』（以下、ESDの資質・態度）である7つの項目でどの力が身についたかについて尋ね、その結果を表3にまとめた。

表3 両校の振り返りより

ESDの資質・態度	松原中学生の回答割合	SMPN21の回答割合
批判的に考える力	9%	19%
未来像を予測して計画を立てる力	23%	8%
多面的・総合的に考える力	16%	26%
コミュニケーションを行う力	30%	13%
他者と協力する態度	6%	13%
つながりを尊重する態度	6%	13%
進んで参加する態度	9%	8%

この結果から、湖沼の保全について学習したが、生徒の回答は大きく異なっていた。松原中学生は「コミュニケーションを行う力」の割合が最も高く、英語でのコミュニケーションを図ったこと、外国の中学生とコミュニケーションを図ったことに大きく影響を受けていることがわかった。一方で、SMPN21の生徒は「多面的・総合的に

考える力」の割合が最も高かった。1つのテーマに対して自国だけでの考えではなく、日本の同年代の生徒と考えを共有することで、様々な視点が得られたと感じているのだと考察する。

次に「SMPN21（松原中学校）の生徒との交流を通して、本テーマに対する見方や考え方に共有する点や異なっている点など感じたことを教えてください。」という質問をし、資料9と資料10にまとめた。

- ・お互い環境問題について向き合って、アクションプランを考えることができて良かったと思う。
- ・国が違って抱えている問題は似ていて、だからこそ意見を共有しながらその国だけじゃなくて世界が協力して解決していくべきだと思った。
- ・Thank youという言葉インドネシアの中学生がたくさん言っていたのを聞いて、感謝の気持ちを伝える大切さがあるのはインドネシアも日本と共通するところなんだと思いました。
- ・水を守りたいという強い意志は、日本もインドネシアも変わらず持っているのだと感じました。
- ・湖の保全について、インドネシアと繋がっていることを感じた。お互いの国の魅力を共感し合い、それを発表することで問題点もわかってくるので交流できてとてもうれしかったです。
- ・湖の問題を解決しようとたくさんのアイデアを考え、同じように湖を愛していることを感じた。自分も湖から世界の環境のことも考えていきたいと思った。

資料9 松原中学生の回答

- ・After the experience I thought with the amazing students from Matsubara J.H.S, in my opinion in similarities, we all have the same goal to reach : to protect our environment and natural habitat surround us. But what's something knew that I never

did before is to communicate with Japanese people which is amazing to me, and I'd like to learn more about their language and their country environment because I really wanted to go there. I heard it's so much clean there and I'd like to come visit sometimes. Maybe about the differences I saw so far through my interactions is only from the language we use. But it won't limit us to reach our goal, I believe it. And last from me, would you like to invite us to your beautiful Japan?

- ・The sensitivity and discipline of Japanese people is higher than Indonesia people. Both country actually cares about their environment. But Japanese people will be more focused on how to "prevent", while Indonesians will be more likely to know "how to fix it."
- ・Because of the differences in the types of environments observed, we can see how other environments are managed. In my opinion, I can see that the environment in Indonesia is still lacking when compared to the environment in Japan. Therefore, I will spread awareness about the environment in Indonesia, especially Rawa Pening.

資料10 SMPN21の回答(原文)

両校の振り返りから、共通点として次の点が明らかになった。第一に、自然や湖を守ることの重要性を強く認識していることである。生徒たちは、自国の地域社会においても湖沼保全が未来に直結する課題であると理解しており、学習を通してその意識をさらに高めていた。第二に、言語や国の違いを超えて共通の価値観を見いだせたことである。両校の生徒が意見を交わす中で、文化的背景が異なっても持続可能な社会の実現に向けた思いや姿勢には多くの重なりがあることを実感した。

9 | まとめ

本研究は、ESDの理念を基盤とし、英語科と総合的な学習の時間を横断する実践を通して、湖沼の環境保全を題材にしたユース主体の教育の可能性を探ったものである。琵琶湖という地域資源を自らの生活と結び付けて考えさせたことにより、生徒は環境問題を抽象的な知識としてではなく「自分事」として捉え、主体的に課題解決へ向かう態度を育み始めた。さらに、「世界湖沼の日」を契機としたインドネシアのSMPN21との交流は、生徒に国境を越えて課題を共有する意義を実感させ、ESD for 2030が掲げる「ユースのエンパワメント」に具体的な形を与える実践となった。

振り返りからは、松原中学校の生徒は「コミュニケーションを行う力」を、SMPN21の生徒は「多面的・総合的に考える力」を相対的に高めていることが示され、交流を通じて互いに補完し合う関係が成立していたことが明らかとなった。一方で、知識を生活や社会の課題解決に結び付け、持続的な行動へと転換させる力は依然として十分に育成されておらず、今後の課題である。

以上より、本取組はESDの枠組みを活かしながら、地域資源を教材化し、国際的な交流を組み合わせることで、ユースが持続可能な社会づくりに主体的に参画する素地を培う教育モデルとして有効であることが示唆された。

10 | 参考文献

- ・ユネスコ『「持続可能な開発のための教育：SDGs実現に向けて(ESD for 2030)」ロードマップ【日本語】』
- ・文部科学省『中学校学習指導要領（平成29年告示）解説 総合的な学習の時間編 平成29年7月』
- ・文部科学省『ESD（持続可能な開発のための教育）推進の手引き』（改訂版）
- ・草津市教育委員会『「スクールESDくさつプロ

ジェクト」リーフレット』

- ・東京書籍『NEW HORIZON English Course3』
- ・The IUCN Red List of Threatened Species[<https://www.iucnredlist.org/ja>]